
ライデン大学・ボン大学における 早稲田大学図書館所蔵蘭学資料展について

松 下 眞 也

はじめに

2000年6月より8月にかけて、ライデン大学（オランダ）・ボン大学（ドイツ）と早稲田大学の共催により、ボンおよびライデンにおいて、早稲田大学図書館所蔵資料による蘭学資料展覧会をおこなった。展覧会は幸いにしてドイツでもオランダでも好評をもって迎えられ、無事、成功裡に終えることができた。早稲田大学図書館所蔵の貴重資料をまとまった形で海外へ送り出し、展示したのは図書館創立以来初めてのことであり、所蔵資料の広範な公開利用をめざす当図書館にとっても、また国際化をうたう早稲田大学にとっても、きわめて意義のある催しであったと思われる。この展覧会の直後の8月末には、フィンランドのラハティにおいて、早稲田大学図書館所蔵資料による日本文学資料小展示がおこなわれ、これも好評を得た。今後こうした機会がさらに増えるとすればきわめて喜ばしいことである。

本稿では、蘭学資料展覧会の実務を担当した者としての立場から、この展覧会が企画され、開催されるにいたるまでの経緯とともに、展覧会の概要、現地での評判などを簡単に報告し、さらに、いささかの反省点や一般に展覧会を海外において開催する場合の留意点についても管見を述べたいと思う。

早稲田大学図書館の蘭学資料

早稲田大学図書館が誇るこのできる貴重なコレクションの一つに蘭学（洋学）関係資料がある。

周知のごとく、蘭学とは、阿蘭陀（オランダ）の学問の意味であり、いわゆる「鎖国」体制下にあった江戸時代において、長崎出島のオランダ商館を通じてもたらされた西洋自然科学を中心とする知識体系を、日本人として初めて学び、日本語に移した人々がつくっていった学問をさす。

明治維新後の日本のいわゆる近代化の原動力の一つとなったともいわれる「蘭学」（洋学）に関する資料を、早稲田大学図書館が収集しはじめたのはさほど古いことではない。市島館長時代に「文明源流展」のような企画も実施されたが、洋学資料の収集に力を入れたのは岡村千曳第4代図書館長（在任1947.2 - 1953.3）であり、洋学に関する著作ものこしている⁽¹⁾。岡村館長時代に、大槻家家伝の資料が図書館に入った。大槻（玄沢）家の資料は、それ以前に静嘉堂文庫、仙台市立図書館などにも入っているが、早稲田大学図書館にその一部が受け入れられたのは昭和28年（1953）1月のことで、約80部120点ほどを一括して購入している。その中には「芝蘭堂新元会図」も「杉田玄白肖像」も「重訂解体新書」も含まれていた。これらは「大槻文庫」と仮に名づけられていたが、さらに、岡村先生自身の蔵書や、元本学教授・勝俣銓吉郎先生の蔵書などを併せて、「洋学文庫」（請求記号・文庫8）と命名し整理を開始したのは、昭和43（1968）年のことである。

ちょうど「明治100年」にあたっていたその年、それを記念する催しとして、約200点を展示する大規模な「洋学資料展」が行われ、資料図録も刊行されている⁽²⁾。

昭和46（1971）年に約3,300点につき、一応の整理がおわり、「洋学文庫目録（稿）」が刊行された。

洋学文庫は複数のコレクションを併せた経緯から、閉じられた文庫とはならず、その後も新収の関連資料を取り入れつつ拡充発展した。後にこの

文庫に組み入れられたもので最も重要なものは、蘭学の家・桂川家の家伝資料500点余（桂川今泉文庫）で、昭和63（1988）年に購入（一部分寄贈）されている⁽³⁾。

下って平成6（1994）年、「おらんだ正月200年」の年には、「大槻玄沢関係資料」一括169点が重要文化財の指定を受けた。「芝蘭堂新元会図」「杉田玄白肖像」「大槻玄沢肖像」「江戸ハルマ和解」などを含む重要な資料群である。図書館では重要文化財指定とおらんだ正月200年を記念する展覧会を行い、好評を得ている⁽⁴⁾。

「蘭学展」開催の経緯

1998年10月、本学会津八一記念博物館において、図書館企画展示として「洋学資料展」を開催した。重要文化財を含む約50点を出品し、さすが一級資料ばかりでたいへん見ごたえのある展覧会となった。

この展覧会に、ちょうど早稲田大学との学術交流協定調印のために早稲田を訪れていたオランダのライデン大学総長L・E・H・フレーデフォート博士が立ち寄られた。日蘭学会のウィレム・レメリンク博士、および前ライデン大学日本研究センター教授で現・早稲田大学アジア太平洋センターのクルト・W・ラドケ教授が同行されており、高橋栄一博物館長とともに、松下がご案内して展示資料の簡単な説明をした。

その後、ラドケ教授が図書館に見え、早稲田大学図書館所蔵蘭学資料の展示をライデンで行うことはできるだろうか、という打診をされた。

ラドケ教授と浦川道太郎図書館長との話し合いがもたれ、まず基本的に、展覧会のために資料を提供することについては合意をみた。ただし早稲田大学図書館としては、重要文化財に指定されているものは原本でなくレプリカ（複製）を出品すること、運送時に損壊の危険のある器物などの資料は出品しないこと、という条件をつけ、さらに、

美術品運送専門業者による責任をもった梱包・搬送の保証があること
搬出日から搬入日までの期間、資料評価額に応じた保険料が信頼でき

る保険会社により算出され、支払われる保証があること
資料搬出から開催準備期間、開催期間にかけて、出品資料の取扱に慣
れ、内容をよく知る図書館職員が現地に出張すること
開催前にライデン大学側実務担当者と早稲田大学図書館側担当者が詳
しく打ち合わせ、疑問点のないようにしておくこと

といった条件整備が必要であることを、ラドケ教授を通じて、ライデン
側に伝えた。

開催のためのいちばん大きなポイントは、言うまでもなく輸送・保険の
ための費用である。われわれは、約40点の資料を梱包して日本からヨーロッ
パに運び、展示し、再び梱包して返送するまでの運送費・保険料・通関手
続費用など総費用見積⁽⁵⁾を日本通運に依頼し、それをライデン側に示した。

それからかなり長い間(半年以上)連絡がなかったので、この企画は立ち
消えかと考えていたところ、かなり時間をおいてから、ライデン大学、お
よびドイツのボン大学で経費を折半して負担するので、ぜひ当該展覧会を
開催したいという意向がラドケ教授を通じて伝えられ、話は急に現実味を
おびることになった。

はじめライデン大学からもたらされたこの企画に、いつの時点でボン大
学が加わったか詳細は筆者には不明であるが、ボンには早稲田大学ヨー
ロッパセンターがあり、ヨーロッパにおける早稲田大学のさまざまな研
究・教育活動の拠点になっていることから、ライデンと並んでボン大学で
同展覧会を開催することには別に問題はなかった。

これをうけて、学内では図書館と国際交流課を中心に実施の検討をすす
め、2000年3月、ヨーロッパセンター所長代行・川邊信雄商学部教授(当時
広報室長)、国際交流課の高橋、および図書館から松下がドイツ・オランダ
に出張し、八巻和彦商学部教授(前ヨーロッパセンター所長代行)、A・シュ
プリングマン・ヨーロッパセンター事務長とともに、ボンおよびライデン
の展示予定会場の視察を行い、ボン大学日本文化研究所長ヨーゼフ・クラ

イナー教授、ライデン大学図書館専門司書ヤン・ユスト・ウィトカム博士
ら関係者と会って具体的な打合せを行った。

筆者がもっとも気になっていたのは展覧会のタイトルをどうするかとい
うことで、「洋学」は日本では Western Learning などと訳されているが、
ヨーロッパでは意味をなさない。しかし、話し合ってみると両大学とも、
日本語のまま「RANGAKU(蘭学)」とすればよいということで一致した。総
じて打ち合せを通して、ボンでも、ライデンでも、蘭学展に対する関係者
のなみなみならぬ熱意と期待が感じられた。

両大学での打ち合せのおもな記録は以下のとおりである。

ボン大学・ライデン大学における「蘭学展」開催打ち合わせ

3月15日(水) ボン大学日本文化研究所 / Arithmeum (展示会場)

出席：ヨーゼフ・クライナー教授(ボン大学) 川邊信雄教授 八巻和彦教授 松
下 高橋(国際交流課) シュプリングマン(早稲田大学ヨーロッパセンター)

ボン側に渡した資料： 出品予定41点のリスト(書誌事項) 同・写真(資料の
形状を示すためのもの) 資料解説(1998洋学資料展の際のキャプション、日本語
文) 資料実寸表(壁面・ケース別) 覚書素案(英文) 日本通運作成見積
確認事項

- 1) 開催期日：6月23日(金)*~7月13日(木) *のちに6月21日に変更
- 2) 会場：ボン大学計算機博物館(Arithmeum)中2階ギャラリー(約50m²)
飾付可能な壁面：13m以上 ケース：パウハウス型5 直方体6
照度調整可 セキュリティ・システムあり(警察に直結)
- 3) 費用：20,000DM 出費を既に決定 更に追加費用が必要なならスポンサーを探す
- 4) 主催：ボン大学・ライデン大学・早稲田大学三者共催としたい
- 5) 展覧会カタログ：ドイツ語・オランダ語併記を想定 巻頭論文：クライナー博
士
資料 の日本語文解説を4月中にドイツ語訳して早稲田大学図書館に送る
資料写真原版は早稲田大学図書館が提供 早稲田大学事業部で印刷する
- 6) 追加出品：ボン大学あるいは他大学蔵のシーボルト関係資料の出品を検討中
- 7) 付随する催し：6月26,27日に、シンポジウム

Gesellschaftliche und wirtschaftliche Aspekte der frühen europäischen
Kontakte mit Japan を開催する

- 8) 展覧会のタイトル：“RANGAKU（蘭学）”とし、説明的な副題をつける
9) ポスター：ボン側で作成する。

3月16日（木）ライデン大学中央図書館

出席：ヤン・ユスト・ウィトカム博士（ライデン大学図書館）ラドケ教授（早稲田大学アジア太平洋センター）イフォ・スミッツ準教授（ライデン大学日本・韓国研究センター）松下 高橋

ライデン側に渡した資料：ボンと同一

確認事項

- 1) 開催期日：7月18日（火）～8月6日（日）
 - 2) 会場：ライデン大学中央図書館 1階 展示コーナー
壁面なし ケースのみ
利用者の出入りする場所の中央にある 展示に適切な照度
掛軸などを展示できるケースを民族学博物館より借用することを検討する
 - 3) 費用：23,000ギルダールの補助金があり、文学部の口座に振込済み
 - 4) 主催：ライデン大学・ボン大学・早稲田大学三者共催とする
 - 5) 展覧会カタログ：オランダ語版を独自作成する 作成費用はライデンで負担する
資料 の日本語文解説蘭訳はスミッツ氏が中心となり担当する
資料写真原版は早稲田大学図書館が提供する
 - 6) 追加出品：なし
 - 7) 付随する催し：開会式 評論家 Koursbroek 氏（日本研究家）に講演依頼を検討している
 - 8) タイトル：“RANGAKU” Dutch Study in Japan（案）
 - 9) ポスター：ライデン側で作成する
クライナー博士と連絡を取り、準備をすすめる。
- 3月17日（金）ライデン大学中央図書館
川邊広報室長がウィトカム氏を訪問、挨拶

2000年という年はいうまでもなく、三浦按針の乗った阿蘭陀船リーフデ号が豊後に漂着してから400年、「日蘭修好400年」の記念の年である。また、ドイツでも、ちょうど「日本年」にあたっており、この企画は計らずも時宜を得たものとなった。

ライデン大学・ボン大学における早稲田大学図書館所蔵蘭学資料展について

ボンとライデン、一見関係なさそうな二つの都市での開催となったが、この両都市は、実は日本の蘭学に大きな影響を与えたフィリップ・フランツ・フォン・シーボルトを介して関係がある。よく知られているように、シーボルトが日本から持ち帰ったコレクションの大半はライデンにある。王立民族学博物館にそのコレクションが所蔵されているが、ライデン大学も古くから日本研究が盛んで、ヨーロッパにおける日本研究の総本山というべき位置を占めていた。また、「シーボルト事件」のあと帰国したシーボルトが居を定めたのがボンであった。現在のボン大学の校舎のあたりに家があっただろう（今はない）。

早稲田に戻ってから、ボンの展示についてはクライナー教授と、ライデンについてはスミッツ準教授と、メールやFAXで連絡を取りあい準備をすすめた。

6月はじめに日本通運美術運送に委託して展示資料をヨーロッパに送り出した。資料は全部で41部130点。内訳は掛軸8軸、卷子本4部6巻、額装絵画3額、冊子本19部102冊、一枚物7部11枚である。寸法が最も大きなものは「芝蘭堂新元会図」複製の入った箱（210cm）。この「芝蘭堂新元会図」はじめ重要文化財指定の5点は、ライデン大学・ボン大学との事前の話し合いにより、原本ではなく精巧なレプリカを出品した。しかし重文指定を受けていない他の資料はすべて原本であり、いずれもきわめて貴重・稀覯な資料である。保険のために算定した評価額の総計は1億1千万円を超えた。資料は1点ずつ傷めないように丁寧に梱包された上、3つの大きな木箱に格納された。

展示品の輸出手続には、輸送品の英文詳細目録・形状と数量を記したリストに各資料1点ずつの写真を付した「カルネ手帳」（一時輸入のための通関手帳）という書類を作成し、税関に提出して認可を受けることが必要である。また、今回は指定文化財は含まれないものの、文化庁への報告も必要となる。リスト作成、資料写真の作成は図書館で行い、税関・文化庁への手続は日本通運が代行した。



このほかに、ぜひ特筆すべきこととして「ワシントン条約」問題がある。こうした展覧会のための学術資料の輸出の場合であっても例外なく、いわゆる「ワシントン条約」(絶滅のおそれのある野生動植物の種の国際取引に関する条約、1975)が適用されるのである。とくに「象牙」が用いられたものは同条約に抵触し、輸出入が全く不可能というわけではないが、申請が必要となり、手続がたいへん面倒とのことであった。象牙は、掛軸の軸頭にしばしば見られるものである。今回の出品予定の中では、「司馬江漢地球儀図」が軸頭に象牙を用いていた。そのため急遽、同資料の出品を取り止め、額装の「司馬江漢富嶽図」に差し替えざるを得なかった。著作者である司馬江漢自身は恐らくあずかり知らぬ装丁表具の材料のため、資料を日本国外へ持ち出しにくいというのは不合理なことである。

ボンにおける展覧会

6月16日に松下と特別資料室の藤原秀之とでボンに向かった。ボンにおける展示会場はボン大学付属の計算機博物館 Arithmeum。1999年に開館したばかりで、世界中のさまざまな計算機が展示してある新しいコンセプトの博物館である。計算機のほかに「コンクリート・アート」と呼ばれる絵画、オブジェなどが飾られており⁽⁶⁾、日本の古書の展示はあまりなじまない雰囲気にも思われた。また、斬新ないわゆる現代建築であるため、建物の前面の外壁が総ガラス張りであり、展示物は外の道路から丸見えで、ガラスを通して太陽光がさしこみ、ふるい紙の資料を長く展示することには懸念もあった。最新の防犯設備を備えているという説明を受けたが、貴重資料の展示にあたっては、やや不安であった。

その2階ギャラリーで、“Rangaku - Westliche Naturwissenschaften im Japan der Edo-Zeit”(蘭学 - 日本の江戸時代における西洋自然科学)展が行われた。

6月17日に日本通運ケルン支店が日本から輸送した展示資料を Arithmeum に搬入した。展示に使用できるスペースは約50㎡ほどの二面を壁、



梱包された資料

二面を手すりに囲まれた中二階のギャラリーで、常設展示の流れからは離れた位置関係にある。1階入口左手の階段を上り右にまがるとそのスペースに向かう片側が手すりとなった廊下があり、その廊下の壁面も展示用に使うことができる。壁面には「芝蘭堂新元会図」ほかの掛軸、「平賀源内肖像」ほかの額装物を飾り、卷子本や冊子体の本、一枚物などは、Arithmeum 備品のガラスケースの中に入れた。ガラスケースは2種類あり、台の上に置く直方体のものが大小7個、そして「バウハウス・タイプ」という上下2段に展示できるものを5セット使用した。それでも全ての資料をケース内にディスプレイすることができず、いくつか引っ込めざるを得なかったことは遺憾であった。

展示には早稲田大学の資料のほかに、ボン大学所蔵のシーボルト自筆蝦夷地図、ボーフム(Bochum)⁽⁷⁾大学所蔵の鳴滝塾塾生がシーボルトに提出したオランダ語論文二種を飾った。前者はいわゆる「シーボルト事件」の際に、出島に幽閉されたシーボルトが高橋作左衛門から贈られた禁制の伊能地図を密かに写したもの⁽⁸⁾の更に精密な写しであると考えられている。また後者は、ボーフム大学レギーネ・マティアス教授のご厚意により借用展覧されたもので、今回出品している早稲田大学図書館所蔵の「シーボルト外科証明書」(シーボルトが鳴滝塾生にあたえた免許状)と関連しあう資料であるといえる。

展示設営には、ボン大学日本文化研究所の若い研究者の面々が協力してくれた。その人たちと話して感じたことは、ヨーロッパの日本研究が、もはや従来のような能や歌舞伎、浮世絵といったジャポニズム的なものをはなれ、アクチュアルなものになっているということであった。森首相の神の国発言をみんな知っていたし、ひとりは現代日本のバイオエシックスに興味があると言っていた。情報が瞬時に世界で共有されるネット時代であることを強く感じる。

ボンの展示カタログ⁽⁹⁾は早稲田大学図書館の洋学資料展解説をもとにボン大学日本文化研究所・ペーター・クライネン氏らがドイツ語解説テキスト

トを作成し、電子メールで送られた原稿を早稲田大学事業部で印刷した。A4判20頁(カラー印刷部分4頁)。表紙は杉田玄白肖像、裏表紙は芝蘭堂新元会図が使われている。奥島孝康早稲田大学総長による開催あいさつ、クラウド・ボルヒャルト・ボン大学学長による祝辞、ヨーゼフ・クライナー教授による序文を付す。この目録は展示会場において1部5マルクで販売された。なおこのカタログの製作費は早稲田大学ヨーロッパセンターが負担した。

6月21日、Arithmeum において100名ほどの関係者を集めて蘭学展の開会式・レセプションが行われた。

ボルヒャルト・ボン大学学長、野口洋二早稲田大学理事、クライナー教授がスピーチし、日本の蘭学に関する資料展をその源流であるヨーロッパで開催することの意義を述べた。ドイツの日本研究者・学生、大学関係者、報道関係者、在独の日本人を中心に多くの列席者があり、盛会であった。開会式ののち展示を展観した。

展示はたいへん好評といえた。重要文化財指定のものはレプリカでの展示であるとはいえ、ほとんどの展示資料はすべて原本、現物である。27冊本の蘭和辞書「江戸ハルマ」は版本であるが、訳語を手書きで書き込んだもので稀覯本であり、「ドドネウス草木譜」や「舎密開宗」をはじめ、どれもこの世に1つしかない自筆稿本の原本である。やはり生の資料、日本でもふだんは滅多に目にすることのできないめずらしい資料をこれだけ多く日本からもってきて展示したということ、みんな喜んでいただろう。

ボンでの展示は約3週間続いた。この間、前述したボン大学日本文化研究所主催のシンポジウム(初期日欧のコンタクトについての経済的・社会的アスペクト)がArithmeumで行われたほか、この展示のことがBonner Rundschau はじめいくつかの新聞にも紹介され、随時、日本研究者を中心に多くの観覧者があった。約3週間の会期中蘭学展の観覧者総数は推計で約800 - 1,000名。5DMで販売したカタログは42部売れた。意外に少ない部数のように思われるが、クライナー教授の話では、展示観覧者の20 - 25人

ライデン大学・ボン大学における早稲田大学図書館所蔵蘭学資料展について
に1人程度の割合でカタログは売れるものらしく、それから逆算して800 -
1,000名という観覧者数が推定されるとのことだった。

ライデンにおける展覧会

引き続きライデンでの開催となる。7月13日に松下がボンに飛び、14日
にボン会場の展示の撤収を行ったあと、川邊信雄教授らとオランダに向
かった。

7月17日に日本通運スキポール支店がボンから輸送してきた資料をライ
デン大学中央図書館に搬入し、ウィトカム氏はじめ図書館の担当者と協力
して展示設営をおこなった。

展示会場はライデン大学中央図書館の1階展示コーナーで、貸出カウン
ターと参考カウンターの間にあるスペースである。とくに仕切りのような
ものではなく図書館入館者が自由に見られるようになっている。

具体的な展示レイアウト計画、備品の整備の進行などについて、ライデ
ンに関しては情報がほとんど入らず、いささかの不安があった。3月の下
見の際に、展示コーナーに平置きの覗きケースしかなかったので、このま
までは掛軸や額装物が展示できない旨を言っておいたのだが、その問題が
解決されているのかどうかについては現地に行くまでわからなかった。し
かし驚くべきことに、芝蘭堂新元会図ほかの掛軸の寸法に合わせた特注の
ケースが4つ用意されていた。このケースは、裏表二面に軸物・額装物を
飾ることができるようになっていた。ボンでは、搬送してきた資料すべて
をケースに入れることができなかったのだが、ここにはすべてを展示す
ることができた。掛軸・額のほか、通常ごく一部しか開くことができない巻
物類、ペリー来航の金海奇観や大黒屋光太夫の北槎聞略付図も、余裕をもっ
てかなり多くの部分をひろげることができた。

ライデンの展示カタログ⁽¹⁰⁾は同じ早稲田大学図書館洋学資料展の解題を
もとに、スミッツ氏がオランダ語解題テキストを作成、ライデンにおいて
印刷刊行した。A5判72頁。表紙・裏表紙とも茶色地に大槻玄沢肖像(切り



ボンにおける展示

抜き)。ウィトカム氏による序文、北アイオワ大学準教授レイニアー・ヘスリンク氏(当「早稲田大学図書館紀要」47号に「芝蘭堂のオランダ正月」を寄稿)による早稲田大学図書館蘭学コレクションの解説を付す。ほとんどの展示資料のモノクロ写真を入れているが、やや焦点のあわぬ図版もいくつかあり、これは写真図版の版下用にあとから送った精巧な焼付写真版が間に合わず、レイアウト計画用のため3月に渡しておいた素人撮影のスナップ写真を一部用いざるを得なかったためと考えられる。タイトルページの「芝蘭堂新元会図」の写真が裏返っていたこともふくめて残念である。原稿を送ってもらってこちらで印刷したボンのカタログに比し、ライデンには展示資料解説の日本語文を送ったのみで、カタログの製作過程にはまったくタッチできなかったのも、こうした細かい点に目がゆきとどかなかったことが悔やまれる。このカタログには、Kleine publicaties van de Leidse Universiteitsbibliotheek Nr.37と刷りこまれており、ライデン大学図書館でおこなう展示カタログにはある程度きまった判型があるのかもしれない。このカタログも20ギルダーほどで売られていた。

ボンのカタログ作成過程でも同様なことがあったが、日本語解題をオランダ語になおす際、主として人名などの固有名詞の読みかたを訊ねられることが多かった。しかし蘭学者・蘭学関係者には、必ずしも伝記が明らかでない人もいる。たとえば、通常の人名辞典などには出てこない画家「南小柿寧一」(みながき やすかず)などの読みを調べるのに意外に難渋した。日本での展覧会では漢字のまま読みをふらずにすますことが多い。調べて不明なものもあり、それらは漢字の音読みとせざるをえなかった。今後の課題といえる。

開会のセレモニーは7月18日、ライデン大学中央図書館のホールに約100名近くを集めて行われた。図書館副館長リンマンス氏、野口理事、ウィトカム氏のあいさつのあと、高名な評論家で日本研究家 Rudy Kousbroek 氏による、平賀源内についての講演があった。

セレモニーのあと、参会者による展示展観が行われ、ふだんは静謐を保つ



ライデンにおける展示

ているべき図書館内がおおぜいの展示観覧者でざわめいた。参加者はおもにオランダの日本研究者、学生、図書館員、大学関係者、大使館関係者、報道関係者、在蘭の日本人研究者・学生など。

どの人もたいへん興味深げに、はるばる海をわたってきた資料に見入っていた。

ライデンの街中には日蘭修好400年を祝う小旗がはためき、各種の日本関係の催しが行われていた。あとで野口先生と行ったアムステルダムでは、ダム広場に面した王宮で阿蘭陀商館長江戸参府の展覧会が行われていた。日蘭修好400年にちなんだ記念出版⁽¹¹⁾もおこなわれている。ささやかな展示とはいえ、このような記念の年にこの蘭学資料展をオランダで、しかもライデンで開くことができたのは幸いであったと思う。

ライデンでの展示も約3週間であった。その期間のライデン大学中央図書館入館者はすべてこの展示を目にしたはずであるが、正確な総観覧者数はわからない。しかし、のちに撤収に行った際にスミッツ氏やライデン大学の日本人留学生にきいたところでは、やはりドイツと同様、日本研究者を中心にたいへん好評を得たようであった。事実、ヴェルツブルクのシーボルト記念館、ユトレヒト大学などから、それぞれこの展示を巡回できないかという非公式な打診があったほどである。

この展示からすぐあと、8月末には、フィンランドのラハティ（Lahti）市立図書館において早稲田所蔵の日本文学資料展（Old Japanese manuscripts from the collection of Waseda University）が行われた。⁽¹²⁾ これも大変好評を得たとの報告であった。今後も、機会があり、条件がととのえば、海外での展覧会開催は大いに進めるのがよいと思う。

ライデン、ボンにおける「蘭学展」出品資料

（番号はライデン大学中央図書館における展示番号。カッコ内はボン大学計算機博物館における展示番号）

1 青木昆陽肖像並墓碑銘拓本 森鑛子画 墓碑銘享保20（1735）紙本白描 1軸 文庫

8-A249

「甘薯先生」といわれた蘭学の先駆者のひとり、青木昆陽（1698 - 1769）は幕府御書物奉行をつとめた。肖像は森立之の孫、鑛子が描いたもの。墓碑銘拓本と合装したのは大槻如電で、昆陽150年祭にちなんだものである。（Bonn 不出）

2 41 新井白石シローテ訊問覚書 新井白石自筆 宝永5（1708）4丁 口12 - 1116

宝永5年、天主教布教のため潜入したイタリア人宣教師シローテ（シドッチ）を白石が訊問した折の自筆覚書。自筆の『詩経図総目』草稿と合綴されている。

3 4 平賀源内肖像 中丸精十郎画 明治19（1886）油彩 1額 文庫8-A256

源内の肖像画としては、高松藩家老木村黙老の描いた『戯作者考補遺』にある煙管を手にしたものが有名であり、中丸もそれを参考にしたものと思われる。中丸精十郎は川上冬崖に洋画を学んだ。本図は大槻如電の依頼により制作したものといわれている。

4 5 建部清庵肖像 北郷元喬画 安永7（1778）絹本彩色 重要文化財（複製）1軸 文庫8-A251

建部清庵（1712 - 82）は奥州一関藩医で、大槻玄沢の師であった。玄沢は清庵の許しをえて杉田玄白に入門したが、その年に描かれたものである。大槻家にのこされたこの肖像は、玄白肖像と対幅に仕立てられている。

5 7 杉田玄白肖像 石川大浪画 文化9（1812）絹本彩色 重要文化財（複製）1軸 文庫8-A252

玄白八十歳の肖像。画家石川大浪によるもので、西洋画法が取り入れられている。『解体新書』の翻訳や『蘭学事始』で知られる杉田玄白（1733 - 1817）は若狭小浜藩酒井家侍医の家に生まれ、蘭学興隆の祖となった。

6 40 蘭東事始 杉田玄白撰 大槻玄沢序 林洞海写 1冊 文庫8-F18

現在『蘭学事始』の名で知られる杉田玄白晩年の著。「蘭すでに東せり」との意から『蘭東事始』と題された。本書の現存写本は10部ほどが知られている。林洞海は豊前小倉生、幕府侍医、大阪医学校長などを勤めた。

7 25 和蘭訳文略艸稿 前野良沢撰 明和8（1771）本田孝輔跋 写本 1冊 文庫8-F23

『解体新書』翻訳の中心となった前野良沢（1723 - 1803）が著した蘭語学入門書の写本。伝本はきわめて少ない。跋は尾張藩士本田孝輔による。

8 14 林子平肖像 大槻磐溪賛 紙本彩色 1軸 文庫8-A254

高山彦九郎、蒲生君平とならんで「寛政の三奇人」といわれた林子平（1738 - 1793）の肖像。長崎・蝦夷地を周遊し、海防の必要を痛感して『海国兵談』を著し、

松平定信の咎めにあって塾居謹慎を命じられた。

ㄧ(15) 和蘭船図説 林子平撰 天明2(1782)長崎 富島伝吉梓刻 1軸 文庫8-A242

林子平は3度目の長崎遊学の際、実見したオランダ船の絵図を作り、解説を加えて一般人の啓蒙のため出版した。寛政2年には『海国兵談』下巻の刻費捻出のため、蘭船図を再刻し銀3文にて頒布している。

1ㄠ(6) 大槻玄沢肖像 小田百谷画 絹本彩色 重要文化財(複製) 1軸 文庫8-A248

芝蘭堂の主、大槻玄沢(1757-1827)の肖像画。同軸に貼りこまれている玄沢の詩『早春感懷』は「芝蘭堂新元会図」上部にある『病中即事』と、ほぼ同文である。画家小田百谷(1792-1862)は京都の人。

1ㄠ(13) 載書 大槻磐水門人姓名簿 寛政元-文政9(1789-1826) 重要文化財(複製) 1巻 文庫8-A228

大槻玄沢の門人帳。38年間にわたる入門者94名の姓名が録されている。玄沢は私塾芝蘭堂において、四天王といわれた橋本宗吉、稲村三伯、宇田川玄真、山村才助らを育てた。「載書」とは誓約書の意。

1ㄠ(8) 重訂解体新書 4巻・付図 大槻玄沢訳編 5冊 ヤ3-1061 文庫8-A36

杉田玄白が安永3年(1775)に刊行した『解体新書』の翻訳改訂は、弟子の大槻玄沢に委ねられた。稿を改めること三回、寛政10年(1798)完成。銅版版下絵は桂川国瑞門下の南小柳寧一による。刊行されたのは文政9年(1838)のことであった。

1ㄠ(9) 西説内科撰要 巻六至一 宇多川玄随訳 自筆 1冊 文庫8-B17

オランダのヨハネス・デ・ゴルテルの著『簡明内科書』を翻訳したもの。わが国初の西洋内科書として寛政5年(1793)から文化7年(1810)にわたって出版され、当時の内科医に画期的な影響を与えた。本書はその自筆稿本。

1ㄠ(10) 羅仙治児全書 宇田川玄真訳 自筆 7冊 文庫8-B25

わが国最初の西洋小児科書。原著者はスウェーデンのローゼンスタインで、そのオランダ語版からの翻訳、宇田川玄真(1769-1834)の自筆稿本。玄真は宇田川玄随のあとをつぎ、養子裕庵らと数々の翻訳に従事した。

1ㄠ(1) 芝蘭堂新元会図 市川岳山画 諸家賛 重要文化財(複製) 1軸 文庫8-A224

大槻玄沢の私塾「芝蘭堂」に集まって、わが国で最初の西暦による新年を祝った蘭学者たちを描いたもの。いわゆる「おらんだ正月」の図である。時は寛政6年間11月11日、西暦1795年元日のことであった。

1ㄠ(2) 蘭学者見立番付 三種 寛政5至10(1793-98) 写本 3枚 ㄠ5-1646

寛政年間の蘭学者の見立番付で、芝蘭堂の新元会の余興に作られたものか。百余

名の名を芝居の紋番付「都にない」、狂言「近來繁栄蘭学曾我」「名流桂川水」「浮事吾妻風」と相撲番付に仕立ててある。津山藩主松平斉民ののこした『芸海余波』という貼込帖にある。

1ㄠ(11) 惜字帖 森島中良蒐集貼込帖 文化元(1804) 装丁 2冊 文庫8-J53

森島中良(1754-1810)は桂川国瑞の弟で、蘭学者としてのみならず、森羅万象、二世風来山人などの号をもつ戯作者としても名高い。長崎に舶載された珍しい品物の広告や商標、蘭文など雑多なものが貼り込まれている。

1ㄠ(12) 石川大浪天童図 石川大浪画 原本 1枚 文庫8-B141

「杉田玄白肖像」を描いた石川大浪(1765-1817)の珍しい小品。石川は大番組頭をつとめた幕臣で、はじめ狩野派に学び、のちに西洋画法を学んだ。署名のTafelBergは彼の名「大浪」のオランダ名であるという。

1ㄠ(18) 司馬江漢富嶽図 司馬江漢画 寛政元(1789)8月 紙本彩色 1額 文庫8-B147

静岡県清水市にある峠からみた富士山の図。司馬江漢(1747-1818)は絵をよくし、浮世絵に西洋画法を取り入れ、また西洋風の画法を創始した。

2ㄠ(19) コペルニクス天文解 司馬江漢撰 写-自筆 1冊 ㄠ5-2337

コペルニクスの地動説は、長崎通詞本木良永が安永3年(1774)にオランダの天文書を訳して初めて知られたといわれる。江漢は長崎で地動説を知った。本書は文化5年(1808)刊行される書のもとなる自筆稿本である。

2ㄠ(26) 波留麻和解 一名江戸ハルマ 稲村三伯編 寛政8(1796) 27冊 文庫8-C513

編者の稲村三伯(海上随鷗、1758-1811)は鳥取出身、大槻玄沢の門に入り、石井庄助、宇田川玄随らの協力をえてハルマの和訳を完成させた。木活字でオランダ語の見出しを組み、右に訳語を記している。長崎ハルマ(ドゥーフ・ハルマ)に対して江戸ハルマと呼ばれた。

2ㄠ(27) 長崎ハルマ Hendrik Doeff 編 坪井信道写 8冊 ホ10-1749

長崎のオランダ商館長ヘンデレキ・ドゥーフ(1777-1835)が通詞の吉雄権之助らの助力を得て文化13年(1816)に完成し、幕府に献上した蘭和辞書。本書は、幕末の蘭学者坪井信道の家に伝えられた写本である。

2ㄠ(38) 光太夫と魯人蝦夷ネモロ滞居之図 隆啓模 寛政5(1793) 紙本彩色 1巻 ㄠ5-9317

ロシアに漂着し、数奇な生涯を送った伊勢白子浦神昌丸の船頭大黒屋光太夫(1751-1828)がロシア使節ラクスマンとともに根室に到着した際の様子。松前藩士から借覧して模写されたものという。

24大黒屋光太夫将来露国教科書 1冊 KA-1701

大黒屋光太夫がロシアから持ち帰ったもので、エカテリナ2世の勅令により刊行された18世紀学制改革期の国民学校（小学校）用の算数の教科書である。（Bonn 不出）

25(39)北槎聞略付録図 桂川国瑞撰 寛政6（1794）紙本彩色 2巻 文庫8-J21

光太夫のロシアにおける見聞を桂川国瑞（1751 - 1809）が記録し、オランダ書の世界地誌により補訂して体系的に編集した『北槎聞略』は当時のロシア事情のすぐれた紹介の書であった。本書はそれに付された図である。

26大黒屋光太夫露文色紙 2枚 文庫8-B141

漂流光太夫のロシア文字手蹟。「行く末は誰が肌触れむ紅の花 大光」「亀 長寿の嘉瑞なれ 伊勢大光」（Bonn 不出）

27(17)桂川国瑞麝獸図 宇田川玄随賛 天明3（1783）紙本彩色 1軸 文庫8-C910

フランスの薬学者ニコラ・レムリー（1645 - 1715）の『薬物辞典』のオランダ語版から、麝香鹿（じゃこうじか）の図を桂川国瑞が模し、宇田川玄随が賛を付している。

28洋学者小色紙 文庫8-B141

（1）間大業（1756 - 1816）対句 （2）橋本宗吉（1763 - 1836）蘭文 （3）大槻玄沢蘭文（Bonn 不出）

29(32)野取図帳 三浦半島一部 伊能忠敬自筆 1冊 ル11-843

享和元年（1801）3月3日から、幕命により、伊豆より東海岸沿いに北上し、陸奥までの実地測量をおこなった際、忠敬がつけていたフィールドノート。

30(16)万国輿地全図 松原右仲画 天保9（1838）大槻磐溪識語 銅版 1帖 文庫8-C13

ロシア使節レザノフのもたらした世界地図をもとに製作された銅版世界地図。ロシア語のままになっている地名もある。作者の松原右仲は備中松山藩の儒者であるが、蘭学も学び、とくに銅版では知られていたらしく、相撲見立番付（16）で司馬江漢と同じ前頭三枚目にいる。

31(30)シーボルト外科証明書 文政10（1827）原本 1枚 文庫8-E21

ドイツ人医師フランツ・フォン・シーボルト（1796 - 1866）が周防国平生村出身の医師岡泰安（1796 - 1858）に与えた外科技術証明書。泰安は文政9年長崎に赴いてシーボルトの教えを受け、眼科・外科・内科に精通した。

32(31)高野長英蘭文書簡 岡泰安宛 文政10（1827）原本 1額 文庫8-E22

高野長英（1804 - 1850）は文政8年に長崎に遊学し、シーボルトに学んだ。この

書簡は、同門であった岡泰安に送ったもので、長崎遊学時代への惜別の想いをつづっている。岡家旧蔵。

33(3)ヒポクラテス像 宇田川榕庵画 絹本彩色 1額 文庫8-G7

ギリシアの医聖ヒポクラテスの像は多くの蘭学者が描き、儒者が神農氏をまつるように、その像を掲げた。「芝蘭堂新元会図」（15）の図中央にも壁に掲げられているのが見える。

34(24)ドドネウス草木譜 石井当光等訳 稿本 文庫8-F4, 5, 6 付・原本

オランダの植物学者ドドネウス（1517 - 85）の『草木誌』は、日本に舶載された西洋博物書のうち、もっとも多くの人に利用された書物である。松平定信が全訳を命じ、石井当光、吉田正恭、羽栗費らがこれに当たったが、江戸大火により焼失した。本書は稿本の一部である。

35(21)大西楽律考 宇田川榕庵訳編 自筆 1冊 文庫8-B41

西洋の音楽について、オランダ書や中国書のなかを博搜、抄録して、考察を加えたもの。著者榕庵の多才博識の一端をうかがわせる資料である。

36(23)植学啓原 三巻・付図一卷 宇田川榕庵撰 天保4（1833）序 3冊 文庫8-B36

文政5年（1822）西洋植物学の入門書『菩多尼訶経』を刊行した宇田川榕庵が、スウェーデンの植物学者リンネの著作など多くの書物を参考に編纂した日本最初の本格的西洋植物学の書。

37(20)舎密開宗 宇田川榕庵訳編 自筆 天保8（1837）刊行 文庫8-B27～32

イギリス人ヘンリー（1774 - 1836）の著『化学概要』のドイツ語訳をさらにオランダ語訳したテキストから、宇田川榕庵（1798 - 1846）が著した未完の大著。「舎密」（セイミ）はオランダ語の「化学」を音訳した語。近代化学の受容に直結する大きな業績である。

38(37)金海奇観 二巻 ベルリ神奈川応接絵巻 大槻磐溪・鍬形赤子等画 嘉永7（1854）紙本彩色 2巻 文庫8-A230

1854年、米使ベルリ再度の来航に際し、大槻磐溪が藩命により浦賀に赴いて、本牧沖に碇泊するアメリカ船や横浜の応接所、ベルリほか使節の肖像などを描いたもの。「金海」とは「金川」（神奈川）の海の意味である。

39(22)ボトカラヒイ 宇田川興斎撰 自筆 1冊 文庫8-C586

玻璃版（ガラス版）を用いた写真の現像法、定着法などについて記したもの。筆者宇田川興斎は飯沼慾斎の三男で、宇田川榕庵の養子となった。

40(28)英和对訳袖珍辞書 堀達之助編 文久2（1862）洋書調所刊 1冊 文庫8-C586

活字本として日本で最初に公刊された英和辞典。安政期以後、開国によって英語・

英学の需要が急激にたかまったのを受けて、洋書調所において急ぎ編訳したもの。
初版は200部であったが、改訂増補され版を重ねた。

41川上冬崖蝦夷図 1枚 文庫8-B141

川上冬崖（1828 - 81）は安政年間に蕃書調所に入り、絵図調出役となり西洋画法を研究した。明治維新後も新政府に出仕し、大学や陸軍などで西洋画教育に携わった。下谷御徒町の自宅に画塾を設け門人を育てた。（Bonn 不出）

ボン大学の展覧会における追加出品資料（ボン大学およびボーフム大学所蔵資料）

* 番号はボンにおける展示番号

33. Ezo-Karte des Philipp Franz von Siebold（シーボルト自筆蝦夷地図）

「シーボルト事件」で日本を追放される前夜、出島において没収される伊能忠敬の日本地図を写したといわれるシーボルトが、帰国後、大著「ニッポン」の口絵とするためにあらためて書いた日本図のうち蝦夷（北海道）の部分図。ボン大学所蔵。

（Bonn 15013/80）

34. “Dissertation” des Siebold-Schülers Totsuka Ryōsai: “Over de oorzak der kinderpokjes en Mazelen”（戸塚亮齋蘭文）

長崎鳴滝塾におけるシーボルトの高弟戸塚亮齋（1799 - 1876）のオランダ語による論文。ボーフム大学所蔵。

（Bochum 1.307.002）

35. “Dissertation” des Siebold-Schülers Kō Ryōsai: “Catalogus van eenige kruidkundige boekwerken door Ko Riosai”（高良齋蘭文）

戸塚亮齋と同じく鳴滝塾に学び、岡研介、高野長英らと切磋琢磨した蘭方医、高良齋（1799 - 1846）のオランダ語論文（日本本草学者の著作解題目録）。ボーフム大学所蔵。

（Bochum 1.303.000）

36. Siebolds “Nippon”

（Bonn 3918/60）

シーボルト著「ニッポン」。

早稲田大学における展覧会

ボン、ライデンでの展示を終えて戻ってきた資料を、2000年10月17日（火）から27日（金）まで、早稲田大学総合学術情報センター2階展示室において展覧に供した。いわば“凱旋”の展示会である。会場には早稲田大学図書館所蔵資料に加え、ボン大学、およびボーフム大学のご厚意により貸し出されたシーボルト自筆蝦夷地図、「鳴滝塾」の塾生高良齋・戸塚亮齋

のオランダ語論文も並べることができた。駐日オランダ大使館の後援を得て、展覧会のタイトルを「日本・オランダ修好400年記念 蘭学資料展」とし、各方面に広報・宣伝した。

この展覧会は日本経済新聞が二度にわたって取材し、9月22日朝刊の文化面、および10月17日朝刊の社会面に報道記事が掲載された。また展覧会会期中には朝日新聞の取材があり、10月21日（土）夕刊の文化欄のコラム「ナビゲーター」に記事が掲載された。

会期初日の10月17日（火）午前10時より開会のセレモニーを行った。展示会場前のロビーにおいて、奥島孝康総長、野口洋二理事、エルネスト・ブラム駐日オランダ大使館報道文化部長の挨拶があり、テープカットを行った。

短い会期（10日間）であったにもかかわらず入場者は多く、総入場者数は1,450名に及んだ。これは、会期中の10月22日（日）が早稲田大学の「ホーム・カミング・デー」にあたっており、多くの校友諸先輩が会場を訪れてくれたこと、それにやはり新聞記事として掲載されたことが大きく影響しているものと思われる。とりわけ、新聞記事の効果は絶大である。ふだん展示室でおこなう展覧会に比較して、2倍から3倍の入場者数をかぞえたことは成功といってよいだろう。

来場者のなかには、たまたま日本の学会参加で来日中のボン大学のクライナー教授、ライデン大学のブリュッセ教授などの顔もあった。同時期（10/21 - 23）に東京大学で、洋学史学会の主催による「江戸時代の日本とオランダ」というシンポジウムが開かれており、その参加者が寸暇を惜しんで駆けつけてくるといったこともあった。また、大槻玄沢の直系のご子孫に当られる大槻清彦氏ご夫妻、中村英勝お茶の水女子大学名誉教授、桂川国瑞のご子孫で「桂川今泉文庫」の旧蔵者である今泉純一氏も来場された。狭い展示室内にほぼ常時来観者があり、近來になく活気のある展覧会となった。

おわりに

外国からの依頼にこたえる形で、早稲田大学図書館が所蔵する資料による展覧会を海外で実施し、事故もなく好評裡に終了することができた。総括してこの「蘭学資料展」は成功したといってよいだろう。そのことは早稲田大学図書館にとってはまさしく快挙であり、慶賀すべきであるが、ほとんど初めての経験であったことからくる齟齬や小さな失敗はいくつもあった。

この種の催しは図書館が中心となって具体的な企画・準備をすすめるべき性質のものであるが、外国が相手であり、大学どうしの交流という側面から、相手に対して礼を失することのない対応が必要となる。また、貴重な資料を出品すること自体がすでに国際的貢献であるといえるが、それに加えて、事前のじゅうぶんな準備、関係各方面・機関への広報、宣伝（とくに外国語による）資料のやさしい解題の作成と公布がぜひ必要である。

早稲田大学図書館では、例年10回以上の館蔵資料を中心とする展示会を開催してきている。それらの多くは学内において、本学学生・教職員をおもな対象として開いているわけであるが、同時に現在では展覧会の予告がネット上に掲載され、学外はもとより、その気になれば海外からでもリアルタイムに情報を得ることができる。ひろく世界に情報公開・情報発信をする時代がすでに到来しているわけであるが、このことは同時に、われわれが発信する情報の内容に責任を持たねばならないことを意味している。

われわれは図書館が所蔵する資料の内容を知り、歴史的な経緯と学術上の位置づけを知り、また、物理的な資料の取り扱いをも心得ておかなばならない。そうした裏付けの上で、この種の企画を実施するべきであり、オランダ、ドイツのみならず、もっと多くの国々へ出かけて行って、日本について、早稲田大学についてひろく知らせる機会をもつべきであろう。蘭学資料のみならず、まだ多くの貴重な資料が早稲田大学図書館の書庫には蔵されている。

ライデン大学・ボン大学における早稲田大学図書館所蔵蘭学資料展について

おわりに、本展覧会の実施に尽力されたラドケ教授、クライナー教授、ウィトカム博士、スミッツ準教授、Arithmeum 館長コルテ教授はじめ、多くの関係者の方々、さらにまた、裏面で準備作業を支えたボン大学、ライデン大学および早稲田大学のスタッフに深い感謝の念と敬意を捧げたい。

註

- (1) 紅毛文化史話 岡村千曳著 昭和28(1953) 創元社
- (2) 早稲田大学図書館蔵 洋学資料図録 早稲田大学図書館 昭和43(1968).10
- (3) 桂川家関係資料の受入れに關係して 杉本つとむ 早稲田大学図書館紀要33号 1991.1
- (4) おらんだ正月200年 大槻玄沢関係資料重要文化財指定記念 早稲田大学図書館所蔵 洋学資料展 付・早稲田大学図書館所蔵指定文化財一覧 早稲田大学図書館 1995.3
- (5) 見積細目：集荷料・作業人件費・作業管理費・木箱梱包費・カルネ発給手数料・担保措置料・カルネ代行作成料・輸出通関料・空港使用料・航空運賃・配達諸掛費用・配送料・引取諸掛費用・輸入通関料・取扱料・木箱廃材処理料・消費税・保険料（項目のみ。通関料・配送料・作業人件費などは国ごとに複数回計上される）
- (6) Die Sammlung Erling Neby im Arithmeum; Bonn, Bouvier, 2000
- (7) Bochum：ドイツ西部、ノルトライン・ヴェストファーレン州ルール地方にある都市。1965年ルール大学が置かれる。
- (8) シーボルト先生1 - 3 吳秀三著 平凡社 1967 東洋文庫103, 115, 117
- (9) Rangaku Westliche Naturwissenschaften im Japan der Edo-Zeit : Forschungsstelle Modernes Japan, Universität Bonn/Europazentrum der Waseda-Universität 2000
- (10) Rangaku Hollandkunde in Japan: Waseda University & Universiteitsbibliotheek Leiden 2000
- (11) Bridging the Divide ; 400 years The Netherlands - Japan : ed. by Leonard Blusse, Willem Remmelink, & Ivo Smits. Leiden, Hotei Publishing 2000
- (12) フィンランドにおける資料展報告 兼築信行 早稲田大学図書館報ふみくら66号 2000.12

（まつした しんや 図書課長）